

第一章

鎌倉の海は穩に凪いでゐた。

十二月初めの午後の日が、もう少しく赤みを帯びて、西へ傾き加減に墮つてゐるために、右手に突出た稻村ヶ崎一帯は、燦色の陰影になつて、江の島が半ば顔を出しながら、遠く輪廓を蝕ませて浮んでゐる海面を、對照的に光らしてゐるだけだつたが、反對の小坪の鼻からかけて、葉山の長者ヶ崎を遠望する一方は、明るい橙紅色を含んだ日影を受けて、鮮に、併し強烈ではなく、初期の印象派の畫のやうに照らし出されてゐた。冬の總な日によくある、中空から上はくつきり晴れ上つて、青空がコバルトを濃く輝かしてゐるが、水平線に近づくに従つて暈され、やがて其下は霧とも霞ともつかぬ緋紅色のヴェールに、粉つぼくうつすらと包まれて了ふ。小春日の静けさが、澱んだやうな空象だつたので、大島は影も見えなかつたが、併し天際は遙々霽れ渡つた感じを、決して濁してはゐなかつた。「夜だと、彼處ら邊に三崎の燈臺が、一分間おき位に明滅するんだがね。此頃の荒涼たる夜の海邊で、そいつがちらりと點いて消えるのを眺めると、鳥渡厭な氣がするよ。小野なら、さぞ喜ぶ所だらうがね。」

砂丘の上に腰を下した柳井は、眉深に被つたソフト帽の下から、澄んで寧ろ尖つてゐるやうな、俊秀な瞳で、傍の小野を尻目に向け、細面の顔を擁揄ふやうに突き出して、微笑しながら云つた。「ふん、馬鹿を云ふな。君だつてひどく老人がつて、南畫趣味や禪味を看板にはしてゐるが、十分感傷的な癖に。人に押しつけるのは非道いよ。」

小野は腰を下ろして後身にそり返つたのを、兩手で突合棒のやうに支へながら、柳井が眼で指した三浦半島の、岬のあたりを遙に望んだ儘、柳井の方を向かずに答へた。が、彼の少し赤みを帯びてゐた頬は、その抗辯のために更に赭らんだ。

「それやあ仕方がないさ。兎角、東京に遠く残して来た人があるとなね。」

柳井は澄まして、薄く鮮な唇の傍に、強ひて先廻りをして惚氣を云ふのだぞと云ふ、微笑の皺を刻んだ。

と、其時まで二人と並んで、日に背いたせるか暗い顔をして、膝を抱くやうに蹲つてゐた杉浦が、突然その顔を上げた。彼の淺黒い濛味を帯びた圓顔は、併し微笑を帯びると寧ろ可愛らしかつた。彼は傍から突然冷かすやうに口を入れた。

「ふん。ぢやあ又、燈臺より遠き人ありと思つたかい。」

それは柳井が、餘技的に作る俳句に「花火より遠き人ありと思ひけり」と云ふのがあつて、それを頻りに柳井が自慢して、自ら仄にして、艶麗な名句だと稱し、友人間に膾炙させてゐたのを、振つて冷かしたのだつた。

「さうだね。遠花火のやうな女もいゝが、遠く間を置いて、恒に隣く燈臺のやうな人も悪くはないからな。」

さう云ふ應酬では、柳井は決して敗けなかつた。實際彼には、其年の川開きの晩に、人に連れられて行つたある水邊に近い座敷で、相會うた美しい化粧の女があつた。而して此處から東京へ出かけた折には、明るい灯火の下で會つたり、別れては手紙のやり取りをする位迄其間は進んでゐた。其上に彼には、清淨な許婚の人があつた。その遠い燈臺に比された人は、小野も柳井の家で、いつか正月の加留多遊びをした時に、弟妹たちと一緒に來てゐたのを、それとなく紹介された事があつた。その人は彼の家が芝の高輪に在つた時から、家と家とよく知り合つた、ある中流家庭の令嬢で、其人の父と云ふのは、海軍大學出の俊才として、有名な新進の大佐だつたが、日露戦争の時に、旅順の港外で機械水雷に觸れ、艦と共に水底に沈んで了つて、それから健氣な未亡人の手で、淑しく併し確りと育てられた。若い健康な、どちらかかと云へば少し圓顔の、可愛い女學生だつた。柳井は勿論その人に、靜かで仄かな愛を感じてゐた。まだ彼が大學にゐる時分などは、その許婚が大學とは丘一つ隔つた小石川の谷にある、紫色の制服で知られた女學校にゐたために、學校の歸りに丸善へでも行く時などには、わざ／＼西片町を下りて行つて、その女學校に近い停留場から、電車に乗つた所だつた。そして小野などはよく欺されて、その相伴をさせられることも聞かあつた。それで柳井は其停留場で、一と電車か二た電車待つて、向うの街角から紫色の一隊が、ちらほら現れるのを遠く望むと、別にその人を物色するでもなく、殆ど直ぐに電車に乗つて了ふのだつたが、彼はそんな仄かな愛の彩りを「鳥渡いゝだらう」と云つた調子で、自分も清純な享樂をすると共に、友人たちにもわざと見せて、そして幾らか自嘲的に微笑みたいらしかつた。しかもその電車の中で、うまく出會つた事は殆どないらしかつた。が、彼はそれだけの仄かな心持で満足して、却つて直接出會ふなどと云ふ生々しい事は、避けてゐるのだつた。……

小野が柳井の言葉で、考ふるともなくそんな事を考へてゐる間に、杉浦は更に冷かしの語を次いだ。「成程ね。其上君には、彼處の波打際よりも近い人があるからね。」

「誰だい。まさか角の煙草屋の不良少女やあるまいね。あれは由井ヶ濱小町と云つて、有名なものなんだよ。」

「白はくれるなよ。今日も君の學校へ出かけた留守に来て、何か置手紙をして行つたぢやないか。」

「ふうむ。あの人か。あの杉先生のお嬢さんなら、そんな事を云つちや不可ないよ。あの人もあんな綺麗だのに、身體が弱くて縁遠かつたが、今度横濱のある領事補とかに、婚約が定まつたさうだからね。」

「婚約が定まつたからつて、どうだか解りやしないさ。」

杉浦は暗い笑みを浮べて、更に突込んだ。

「併し僕は實はあの人の婚約が定まつたんで、やつと安心したんだよ。と言ふのはね、僕は實はあの杉先生の家で頼んで、近所に貸間を探して貰つたんだがね。先生の家や僕の事に就いて、殆ど身内のやうに世話をして呉れるんだ。そして何と思つてだか知らないが、つい何か用事があると、あのお嬢さんを使ひに寄越すんだらう。殆ど三日に一度は必ず僕の處へ來るんで、又君たちが自惚れが強いと云つて嗤ふだらうけれど、僕はひよつとするとあの人を僕に呉れたいんぢやないかしらと、内心心配してたんだよ。それやあ僕だつて、決してあの人が嫌ひぢやないがね。高輪のがあるんで、鳥渡困るからな。さればと云つて僕には許婚があると、それとなく面と向つて云ひ切るのも、むざ／＼向うを落胆させるやうなもので、鳥渡可哀さうだし、僕の方でも亦惜しい氣がするからね。そしたらそんな事になつたんで、僕も安心したんだよ。」

柳井は又挑戦するやうに、わざとそんな事を云つた。

「何を云つてやがるんだい。向うでこそ却つて、そんな御心配には及びませんよと、さつさと領事補の事を君に宣言したんぢやないか。」

杉浦は更に皮肉を云つて、くつ／＼と笑つた。

「兎に角、柳井も併し敗けてはゐなかつた。彼はわざと願ひて他を云ふやうに、「あの人の字は實にうまいよ。ほんとに古典的だが、水莖の跡つて氣がするからな。僕もあの人の字に惚れた。たゞ字にだけはね。」

と、嘯くやうに云つた。

「ふん。だから君の六朝擬ひの突兀たる奴と、搗き合せたら丁度いゝだらう。」

「搗き合せ難いぜ。この餅米は思ひの外に固いからね。それよりか素直な、小野の六朝風とならまだいゝだらう。」

「小野のとなら、すぐ搗き合せつて了ふさ。此男は。」

柳井と杉浦は其時まで、いつもに似合はず黙つて、二人の對話を聞いて微笑んでゐた小野を、園内へ誘ひ入れるやうに願ひて、他意なげに笑つた。

小野は、それらの話を聞いてゐながら、赤みを帯びた日を受けて、それでなくても赭い頬を、併し淋しさうにまじり／＼と微笑ませて、

「柳井はほんとに軍國多事だね。」と、羨しさうに云つた。

「うむ。君に比べれば遙かだね。」柳井は直ぐ反撥的に先廻りをした。「だが、それは君、たゞ境遇のせぬなんだよ。僕みたいに東京に家があつて、そして家の親類とか、いろ／＼な知合とかとあれば

ね。自然とそんな工合にもなつて来るんだよ。君なんぞが、幾らか人事匆忙でないのは、やつぱり田舎に家があつて、それから高等學校の寄宿のやうな處にゐて、大學へ來れば殺風景な下宿に居るか、婆さんが片手間にやつてゐるやうな、素人下宿に泊つて居る外ないんだからね。それでは烏渡した家の、お嬢さん階級の異性とすら、さう接觸する機會は少いからね。會にあれば將來の學士を見込んで妙に持ちかける素人下宿の娘とか、多情な未亡人と云つた種類のものではね。君の令嬢崇拜とか、女學生讚美と云つたやうなもの、さう云ふ異性に接觸する機會のない所から起る、一種のヒステリックな要求なんだよ。東京の令嬢階級の異性なんて、珍らしくも何ともない者に取つては、冷静に見ればさう大したものぢやないよ。」

「さうかなあ。——」

小野は柳井から、ゆくりなくも殆ど致命的とも云ふべき、一種の泣き處に觸れられて、さう苦笑する外なかつた。勿論柳井の言葉のやうな事は、彼自身でも自ら考へてゐないではなかつたが、そんな風にキメつけられて了ふ事は、やつぱり妙に淋しい屈辱を、感じない譯には行かなかつた。

「併し小野には、色々なロマンスがあるからいゝさ。此上さう周圍に、べた／＼そんなお嬢さんたちが居ちやあ、片つぱしから惚れて行つて困るだらう。小野には今つ位何にもない方が、丁度いゝんだよ。何しろ、惚れつぽいんだからな。」

杉浦も傍から、少し靨くなつて苦笑してゐる小野に、そんな皮肉な冗談を云つた。

「馬鹿云へ。俺だつて、そんなに無選擇ぢやない。」

小野は思はず眞面目になつて、その眞面目になつた事に、更に恥ぢて顔を鳥渡縋めながら、さう正面から受け止める外なかつた。別な事なら、彼らと取けずに應酬する事も出来る彼だが、さう云ふ問

題に就ては、殆ど初心的に弱かつた。

「だつて君は、君の接してゐる範圍の異性の中で、一番美しいものに必ず惚れて居ると云ふ主義ぢやないか。惚れてゐなければ淋しいと云ふ主義ぢやないか。」

「それやあ俺だつて、自分でも惚れつぽい質だとは思つてゐるし、冗談にそんな事を云つたかも知れんが、決してそんなことがあるものか。そんなことを云やあ今何にもないのはどうしたものなんだい。そんな戀愛主義なんぞ持つちやゐない證據ぢやないか。」

「だから、今はその『淋しい』つて時期なのさ。」

杉浦は其處迄追ひ落して、皮肉に一刀兩斷したのに、自らも満足して、澁い黒い圓顔に、併し慕つてい微笑を一ぱい浮べた。彼はさうした露悪的な、友情の表白を喜ぶ傾向が多かつた。

「成程ね。さう云へばさうだ。」

小野もそれには宛をぬいで、すぐ承引すると共に、心からの笑顔を返さずには居られなかつた。

柳井も笑つた。そして彼は更に悪戯的な笑顔を見せながら、寧ろ半ヶ年位年若な辭に、長上らしい口吻を以て、警告するやうに云つた。

「小野。ほんとに君は氣を付けるよ。學校を出て、だん／＼さう云ふ周圍に接するやうになると、君が一番先に難破しさうだぞ。何處か君の血色のいい顔には、温いが何となく戀の殉教者と云つたやうな、妙な陰影が備はつてるからな。」

「眞實だ。」杉浦もつゞいて云つた。「何しろそんな事がないやうにして呉れ。傍が迷惑だからな。」

「ふん。勝手に人を『月評』しやがれ！」

小野は常から出来るならば、作家として立ちたい希望を持つてゐたために、そんな文壇の月々の作

品を評する意味で、術語になつてゐる言葉を用ひて、それらの友人の批判に酬いた。

それは、赤く煙つて、軽い笑ひの中に一段落ついた。日は、赤く煙つて、傾きながらもまだ中空にあつた。併し砂丘に曳いた三人の影は、うすら寒く長かつた。そしてなだらかな斜面の裾のあたりに、草は半ば枯れたまゝ、離々と明るく戦き始めた。濱防風の芽か何かであらう、一つ特別に緑を保つて、一點日に透いて燦と光つてゐた。夕の波頭が、少し鉛白色の白みを帯びて、先刻より濃きを増した。と、見ると一匹の西洋犬が、何に怖えたのか淋しく啼きながら、波打際を一散に横切つて去つた。

柳井は眉を擡めて、其犬の去つた後を見送つてゐたが、靜に外套の砂を拂つて立上つた。

「さあ、それぢやあ、そろ／＼停車場の方へ出掛けようか。」

「さうだね。もうそんな時間かい。一體何時頃だらう。」

小野も、これは外套も持たずに、粗末な鎧袖の飛白を着てゐたが、その尻の所を砂をはたくと叩き落した。

「もう四時位だらう。だから是から行けば、四時半の汽車に間に合ふよ。僕がいつも學校が退けて、横須賀から乗る汽車だね。それで行けば丁度宵の口に、東京へ着くんだよ。」

「どうだい。柳井も一緒に東京へ行けよ。いゝぢやないか。學校の教官の懇親會なんて。」

杉浦が誘ふやうに云つた。

「いや、さうは行かない。何しろ今度の會は、僕が來任したのを歓迎する意味で、開いて呉れるんだからね。そいつを素つぽかす譯には行かないよ。——それよりどうだい。君たちこそもつと此處に残つてゐてゆつくり遊んで行かないか。」

「いや、日歸りの積りで昨日出掛けて來たんだのに、君の話上手にぼだされて、つい今日まで居て了つた。今日は又君が學校へ出かけた後を、二人でぼんやり留守してゐて、もう澤山な氣がし出したんだよ。それに何だか東京には、僕の居ない間に何か起つてゐさうな氣がして、妙に異心がついてゐるんでね。なあ杉浦。」

小野はさう云つて誘惑を避けるやうに、さつと勢よく立上つた。

「さうだ。もういゝ加減に引込み時だ。是から東京へ歸つて、熱いパウリスタの珈琲でも飲んだ方がいゝ。君もどうだい。花火でも見に行つちやあ。——」

杉浦も合槌を打つた。が、柳井はやつぱり肯はなかつた。

「まあ、兎に角停車場まで送つて行かう。」

小野と杉浦とは、昨日の金曜日からかけて、此處の柳井の貸間住居へ遊びに來たのだつた。柳井は家が東京にあるのだが、いゝ成績で大學を出ると直ぐ、横須賀の海軍の學校に、教官の口があつて赴任したのだつた。そして鎌倉にいゝ貸間を見つけて貰つて、其處から學校へ通つてゐるのだつたが、一人の淋しい生活に堪へ兼ねて、よく東京の友人たちに來いと云つて來た。そして當人は土曜日から日曜へかけて、東京の家へ必ず歸る事にしてゐたので、小野と杉浦は金曜日から來て、一晩話し暮した上、翌日柳井が歸るのと一緒に、東京へ戻らうと云ふ計畫だつた。ところが、一晩柳井の泊つてゐる、海濱ホテルに隣つた洗濯屋の、裏の雜室で話し明したが、丁度その翌日曜日に、横須賀の學校の教官たちが、柳井のために歓迎會を小町園で開いて呉れる事になつてゐたため、第二の一緒に歸京する豫定は、自然壞れて了つたのだつた。

遊び疲れ、話し疲れたが、まだ何となく物足りない心持で、三人は停車場に向つた。

「厭だ。どうせ歸るんなら、東京は宵の口がいゝからな。それとも僕たちが残る代りに、君の方の會を犠牲にして、すつばかして了ふんなら、遊んで行つてもいゝけれど。」

杉浦も意地悪げに答へた。

「ぢやあそこらを散歩しようか。」

やむを得ず柳井は云ひ出した。

「うむ。八幡様の方へも行つて見よう。さうすれば丁度いゝ時間だらうから。」

この小野の提言に、三人はそれから鎌倉八幡の方を、一と廻り散歩して來ることになつた。彼らは先刻來た方とは反對に、停車場前から左手に折れて、大きな松が昔ながらに聳えた下の、茶店めいた家の並んでゐる通りを、鶴ヶ岡の方へと歩いて行つた。もう二の鳥居あたりは夕景で、稀な參詣戻りの田舎人が、ちらほらと名残の姿を行き合せる頃だつた。

三の鳥居を入つて行くと、境内の廣前や石燈には、あか／＼と併し弱い日影がさして、修繕中だつた舞殿の足場は、鳩の羽影も淋しかつた。名高い大銀杏は、もう殆ど黄落し盡して、その梢は荒い筈のやうに、とげ／＼とうすら蒼い空を刺して聳え、たゞ幹の中頃に、こびりついてゐる僅かばかりの葉が、日に眞つ黄色に輝いてゐるばかりだつた。

三人は下駄を鳴らして、石段を駆けるやうに登つた。

隨身門の古びた丹碧にも、日影は淋しく沁みてゐた。そして本殿の方は、所々斜な夕日がさし込んでゐる外、仄暗い夕影に満ちてゐた。もう參詣人の影などは、何處にも見えなかつた。鳩ももう地上には散つてゐないで、庇や簷や、又は彫の柱梁の上などに、すつかり上つて了つて、く／＼と低く啼き交しながら、もう日の終るのを諦めて待つてゐた。其中の四五羽が、高い奥殿の千木のあたり

小野の心も、夕暮に近い海邊の空氣のためか、妙に淋しかつた。何となしに親友たちの、手を執つて泣く程語つてみたいやうな氣持に、淋しく支配されてゐた。彼は柳井と同じく、其年の七月に文科大學は出たが、まだ目ぼしい職業にもありつけなかつた。杉浦は中途で愈けて、まだ大學にゐる身だからそんな心配はしなくていいのだつたが、同じく彼の親友で、京都の大學を出た池田も、職を求めてゐる大きな新聞社に入り、そして皆は大抵定職を得ながら、一方創作に従事しようと思懸けてゐるのに、小野は何の定収入もない上に、果して文藝上の創作を以ても、身を立てうるかどうか、甚だ不安定な位置にゐた。そして柳井の云ふ如く、落實たる下宿屋の一隅に、辛うじて得た安禰譯などをして、其日を暮してゐる哀しい境遇に在つた。その不安と寂寥とが、何げなく快活に語つてゐる彼の背後に、兎もすれば仄暗い影を投げた。彼はその淋しい心持を、今更のやうにこの冬の高瀬の、夕暮近い冷たい空氣の中に、ゆくりなくも身に沁みる程感じて、誰に訴へる事も出来ない哀傷を抱いたまゝ、二人の後から従いて行かなければならなかつた。

彼らが後に見棄てた海は、少し風が出て白く泡立つてゐた。

二

停車場に着いて見ると、丁度四時半の上り列車が、出て終つたばかりのところだつた。そして後の列車が來るまでには、まだ小一時間ばかりあつた。

「君たちにもつとゆつくりして行けと云ふ、運命の暗示だよ。いつそもう一晩延ばして、遊んで行つたらどうだい。」

柳井は丁度間の悪い時間に、停車場へ連れて來た照れ隠しに、そんな事を云つてゐた。

鮮かに夕日を浴びて止つてゐるのが、下からくつきり仰がれた。

小野は小さい時からの癖で、拜殿の前に立つと、叮嚀に手を合せて禮拜した。彼は心中ひそかに、自分の文運の隆昌と、それから自分に美しい戀人を與へ賜はらん事を、眞面目に心の底から祈つた。柳井は微笑して見てゐた。が、杉浦は其様を見ると、

「又かい。それぢやまるで鳩を拜むやうなものぢやないか。」

と云つて冷かした。全く鳩は、口白押しに小野の拜する、頭の上の梁に並んで、彼の鳴らす鈴の音にも驚かず、答へるやうに低く啼き背いてゐた。

小野は自分の祈りの意味を、彼に見透かされたやうに鳥渡顔を殺めた。そして照れ隠しに笑ひながら、頭上を見あげて、

「随分居るね。是だけ居ると鳩の壓迫を感じるね。」

と云つた。勿論それは誇張だつた。

「うん。それは君が鳩に馬鹿にされてるせぬだよ。」

杉浦は更にそんな事を云つた。

「何處かに豆か粟はないだらうか。馬鹿にされないやうに、是だけの澤山な鳩に、洩れなく撒いてやりたいがな。」

「粟なら此處にあるぜ。」

少し離れて、一人神殿の屋根の曲線を見上げたり、隨身門の簷の複雑な形を仰いだりして、コツコツと石礎の上に、杖を鳴らしてゐた柳井が、それを聞いてから云つた。見ると柳井の杖でさす門柱の裏に、餌箱が放置されてあつた。それには金網の張つた蓋がついてゐて、中には大きな粟粒を盛つ

た、鐵葉製の皿が澤山並んで入つてゐた。鳩には取れないが、人は其蓋さへあければ、すぐ其皿を取らせるやうになつてゐた。そして其皿の傍にある木の札に、「一皿二錢 錢は箱の穴に投げ入れられたし。」と、それと同じ意味を、英語でも書いてあつた。打見たところ、それは社務所か何かで、片手間に備へたもので、謂はゞ養錢箱に、餌皿を備へつけたものと云つた方が、寧ろ正しかつた。

今日は參詣人が少かつたのか、それともそんな無駄なことをする人が少かつたのか、金網の蓋の中なる餌皿は、殆ど空になつてゐなかつた。皿は十位並べられてあつた。そしてさう云ふ箱が、其處に二つ備へつけられてあつた。

「こいつは養成。」

小野はすつかり嬉しがつて、自分の財布を探つて二十錢銀貨を一つ見付け出すと、其箱の横の錢入れ口から落し込んで、網の張つてある蓋を開けながら、まづ中の皿を一つ二つ取出した。そして一つをまづ試みに鳩に見せるやうにしてばら／＼と石礎へ撒いた。と、彼が箱の蓋を開ける頃から、何となく啼きの聲を増して、庇や梁に見てゐた鳩どもは、中に氣早く宮縁へ下りて、待つてゐたものさへ二三あつたが、いよ／＼撒いたと見た瞬間に、急に一齊に羽音を立て、ばさ／＼と夕暮の空気を騒がせながら、まるで鷹が斜に吹くやうに、何十羽となく下りて來た。小野は自分の身邊が、思はず灰色に塞されたやうに感じて、吃驚して立つてゐたが、すぐ又第二の皿を撒いた。石礎に下りた鳩どもは、僅か二三尺飛び立つものもあつたが、頻りにあちこちして、其粟粒を隠く間に拾ひ盡した。

其間に杉浦も、皿を二三枚取り出して、又自分の身邊に、さつと同時に霽の如く撒いた。鳩はそれを知ると、半ば肩端へ歸りかけたものも、更に羽音を立て、蟬集した。其中に宮の後の方や、遠くに遊んでゐたもので、仲間の啼聲や羽音を聞きつけて、更に澤山集つて來た。

小野は其箱の中の粟を、すつかり買ひ占めた積りだつたから、又二皿ほど取出すと、それを彼らの眞ん中で撒かうとして、手に持つたまゝ鳥渡立つてゐた。すると、今度はその鳩どもが、すつかり危険がないと見て取つて、彼に馴れて了つたのか、又は其粟粒の争奪に、殆ど夢中になつて了つたのか小野の持つてゐる餌皿を目がけて、まだ撒かない中から、ばさ／＼と飛び寄つて来た。そして或るものは皿の端に辛うじて足をかけ、或るものは小野の腕首にとまり、或るものは肩に休んで、忽ち小野の身の廻りは、近々と鳩の群で満たされた。小野は狼狽と共に、非常な嬉しさを覺えた。

「どうだい、柳井。君も餌をやつて見ないか。」

彼は鳩の羽音の中から、向うの朱塗りの門柱に凭れるともなく其様を見てゐる柳井に向つて聲をかけた。

「うむ。僕は見てゐるよ。僕は永久の傍観者でありたいからね。——それにかう飛び立つと鳩の糞臭So!」

柳井はかう云つて、眼を三角に擧めて微笑しながら、鳩に取り巻かれてゐる小野と杉浦を、『子供だ』と云ひたげに見てゐた。

かうして第一の箱の皿は、忽ち無くなつた。と、杉浦は第二の箱に近寄つて、

「こいつもみんなやつて了へ。」

と、云ひながら、彼は皿を一々持つのが面倒さうに、三つ四つを二度に皿へ翻すと、兩方の掌で揃ひ取つて、それを鳩の居る眞ん中へ持つて来た。もう彼の腕や肩は、鳩の争つて止まる處となつてゐた。

「もう一つ二十錢も入れればやあゝだらうね。」

小野はその第二の箱にも、錢を入れなければ不可なと思つた。そして又乏しい財布の中を探つてゐた。と、杉浦がそれを見て、

「おい。金なんぞ入れなかつていゝよ。鬨はないよ。どうせ鳩に對する功德ぢやないか。宮司の懐ろを肥したつて仕方がありやしない。」

と、云つて皮肉に押し止めた。彼は強ひてそんな惡徳めいた事を行つて、嬉しがる傾向があつた、そして彼は掌中の粟を、鳩のつゝくに任せてゐたが、忽ち一羽の鳩の足を、つと捕へて了つた。鳩は驚いて、二三度ばた／＼と翅を鳴らしたが、さうひどく逃げようとししないで、杉浦の手に眼をきよと／＼させてゐた。

「おい、どうだい。こん畜生は！」

杉浦はそれを小野に見せて、そしてその瓦色の美しい背を愛撫した。

「うむ。可愛いね。俺も獨へてやらう。」

小野もさう言つて、杉浦が只で開いた箱の中から、あるだけの粟粒を取出した。さうしてもう地上の粒を殆ど拾ひ盡してゐた鳩の群の中へ、しやがんで掌を開いた。忽ち彼の手首や腕や肩に、鳩は争つて群がつか。中には彼の茶色のソフの上へ、足を落すものさへあつた。彼は目の前を掠める、瓦色の翼の亂舞の中から、どれを捉へようかと頻りに物色してゐた。

其時、小野の掌の處へ、首を寄せてばた／＼してゐる鳩の中に、一羽眞つ白なのが交つてゐた。彼はそれを獨へようと思つた。そして餌を一方の掌にのみ移して、一方の手を空にしたがら、隙を見てその眞つ白い奴の背中を、ぎゆつと押へて了つた。他の鳩は彼の手の急な動作に驚いてばつと立ち散つたが、捉へられた白鳩は、羽を上から抑へられて、じたばた動かさうと藻掻いたけれど、無駄

今度こそ間違ひなく、彼らは汽車に間に合つた。そして小野と杉浦とは、その三等室の一隅に、向ひあつて席を占める事が出来た。

二人は口々に、車窓から柳井に別れを告げなければならなかつた。「ぢやあ左様なら。」と、小野は云つて、それから沁々とした調子で、特に云ひ添へた。「今度の木曜日には、先生の所へ来るだらうね。もう來週には、先生も癒つてゐるだらうから。」

「うむ。大抵行く。」と、柳井も窓に近く寄つて、「が、もし行けなかつたら、君から僕の近状を傳へてよるじく言つて呉れ給へ。僕も此方へ來てから、詳しい手紙でも差上げなくちやならないんだが、まだ氣が落着かないのと、どうせ今先生に差上げて、病氣で御覽にはなれまいと思ふものだから、つい差上げないでゐるんでね。——だが、先生は來週までに癒つてゐるかしら。」

「さうだね。さう大した事はないんだらう。いつもの胃なんだから。」

「うむ。僕もさうは思つてゐるんだが、又胃潰瘍だと大變だからね。」

「それでも修善寺の例もある事だし、それで死ぬなんて事はあるまい。大丈夫來週位までには、癒つてゐるに違ひないよ。」

な努力だつた。そしてやがてそれも、諦めるやうに静まつて、小野の手の中に身を凍めて了つた。赤い眼がきよとくと哀憐を乞ふやうな、そして半ば信頼しながら危惧してゐる色を見せて、堪らなく可愛い氣を彼に起させた。

小野はその柔毛に包まれた、膨らんだ鳩の胸から透へ、少し熱した頬を押し付けて見た。冷たい、絹のやうな感觸がそこにあつた。そして何となく青つぽいやうな、鳩の臭ひが鼻に來た。彼は何故とも知らず、鳥渡性的な思ひに包まれて、いつ迄も沁々と頬を、其白鳩に擦りつけてゐたい氣がした。そして出來るならばこの鳩を、一匹そつと東京まで捕へて歸りたいと思つた。が、そんな事は氣の弱い彼の、決して爲し得るところではなかつた。彼はあの第二の箱を、只で開けた事にさへ、一種の氣の咎めを感じてゐる位だつたから……。

そんな事をしてゐた時、突然向うの石磴にゐた鳩が、怪しく啼き交した。と、見る間に地上に下りてゐた鳩は、一齊にぱつと凄じい羽音を立て、先刻下りた時よりも激しく、先を争つて舞ひ上つた。その羽と羽とは、互に觸れて相撞つた。そしてその羽叩きに壓搾された空氣は、亂れて小野たちの頬を掠めた。灰色をした羽叩きの擾亂、鳩は一瞬にして庇や梁に、互の位置を争つて上つたのだつた。

小野は何事が起つたのかと思つた。そしてそれと同時に、自分の頬を觸れてゐた鳩が、急に必死と羽叩き藻掻いたので、驚いて手を放した。すると彼の鳩は一番遅れて、雪白な羽を慌しく動かしながら、簀をめぐけて飛び上つた。

ふと見ると、其時丁度隨身門の闕の上へ、黒い逞ましい一匹の洋犬が、ぬつと顔を現はした。小野は何アんだと思つて、其犬が憎いやうな、又滑稽なやうな感じで、そつと微笑を洩しながら、自分の手から脱れて行つた鳩の行方を、屋根のあたりに見上げた。

三

門柱のところで、門内へ斜に射し入つた、長い夕日の筋の中を、先刻の騒擾のために、一つ鳩の緋毛が脱けて、ふは／＼飛び浮んでゐるのを、ぢつと見てゐた柳井は、其時又、

「そろ／＼行かうか。」と促すやうに云つた。

それで三人は又、八幡宮の石段を下つた。下りて見ると、もう廣前はすつかり夕影に満ちてゐた。

「さうだね。」柳井も強く凶想を打消すやうに合槌を打つた。そして語頭を少し曲げた。「どうだい、此頃の『明暗』の調子は、悠々としてしかも力一杯に、層々累々と押し進めてるぢやないか。」

「愈々佳境に迫つて来たね。あれぢやあ、先生も後を書かすには死ぬまい。」

「全くだ。神も書かすには殺すまい。」

柳井もそんな風に合槌を打つた。

彼らが先生と云つてゐるのは、當時の文壇からは退いてゐるが、その特別の關係ある新聞へ、次ぎに大作を発表して、益々堅實老熟な筆致を以て、紅葉後の文豪と稱され、數多の門弟に取り捲かれて隠然たる一大勢力をなしてゐる、勝見濤石氏の事であつた。そして、氏が嘗て大學教授の職に居た關係から、其門弟といふべきものは、多く赤門關係の人が多かつたが、文科大學にゐた柳井や小野たちも、學校を出る一年ばかり前から、その門に出入して、先生の誘掖を受けてゐた。殊に柳井などは、小野や杉浦や池田たちと一緒に、各自の創作を載せる小さな同人雜誌を發行して、其誌上に處女作を発表して以來、就中其才を認められて、非常に推輓されてゐたのだつた。小野とても亦、先生からは可なり認められ、激勵を受けてゐた一人だつた。其上に柳井と小野とは、其年の夏、卒業後の休みの間、房州のある海邊へ一緒に居つてゐた中に、滋々先生と手紙を往復したため、歸つてからは更に非常に親しみを増して、先生の許に出入するやうになつてゐた。先生も必ず、何より先に彼らの負しい創作を読んで、有益な批評を聞かして呉れる事になつてゐた。加ふるに、先生は其頃に至つて、所謂『則天去私』の文學觀を抱くに及び、前よりも一層熱心に、其門へ集る若い人たちに、説話して聞かす例になつてゐた。木曜日と云ふのは、その先生の面會日で、その夜は門弟たちが集つて、先生と親しく談話することになつてゐる日だつた。そして其先生が、少し前から、加賀の金澤に居る

舊友から送られた鴨の粕漬を食べて、宿痾を悪くしたことが、門弟たちの間に傳へられてゐた。その事を彼らは話し合つてゐるのだつた。

その中に汽車は發車した。それで三人は、別にその儘先生の病狀を心から危惧するでもなく、「ぢやあ失敬。」と云ふ中に、別れることになつて了つた。

小野と杉浦は二人になると、對ひ合つて席は取つても、暫くは汽車の動搖に身を任せたまふ、何の話しもなく黙つてゐた。二人はもう強ひて話題を見出ししても何か話をしなければならぬやうな、そんな淺い友人關係ではなかつた。中途に幾らか疎密はあつたが、高等學校の一年以來、ずっと續けて來た友情は、近來一緒に文藝上の創作などに志して、雜誌を始めたりしてからは、更に濃度を加へてゐた。一兩年前には、同じ下宿の一室に、二人一緒に起居もしてゐた。今は各自の都合で別々の下宿には居るが、それが可なり近い處にあつて、一日に一度は、必ず何方からか往來してゐた。散歩などは、必ず二人でするのが常だつた。性質から云へば、小野は陽性の快活で、杉浦は陰性の寡黙派だつたけれど、その性格の相違が昔からずつと二人を結びつけて、却て友情を鞏固にしてゐた。それで嘗て殆ど意見の相違から喧嘩めいたこと一つしたことがなく、今日まで交りを續けて來たのだつた。小野の寧ろ詩人的な咏嘆と、杉浦の哲學的な沈黙。小野の直感的な理解と、杉浦の眞想的な批判。小野の時として輕薄に見える程な敏感と、杉浦の暗愚にさへ見える鈍重な意力、その明るい機智と、その濼い皮肉。……さうしたものが極めて巧みに、喰ひ違ひ相補うて、その辯何處となく二人の氣持は、ぴつたり合つてゐるのだつた。そして二人の關係から云へば、どちらかと云へば小野の方が、先に立つて事を行ふのに黙つて杉浦が従いて來る、と云つた風な傾向を帯びてゐた。それも二人の性格に起因すること、又二人の友情をこれまで永く續かせた原因だつた。そして其處に才氣煥發な柳井

と重厚な池田とが絡まると、この四人を圍る親友關係は、鳥渡類のない程緊密なものだつた。……柳井との饒舌に疲れて、暫く黙つてゐた二人は、大船を過ぐるあたりから、又ほつ／＼他意ない四方山の話始めた。それは取止めもないものだつたが、併し其取止めのない中にも、杉浦の語調は何となくはいやいで、毎になく面白がつてゐるやうに、小野には知らず識らず感じられてゐた。何か悪戯をして、それを黙つてゐるといつたやうな、妙な秘密の嬉しさを持つてゐるらしかつた。そして何気なく話してゐる中にも、何かに心を奪はれてゐる風だつた。が、小野は時々さう心の奥では思つても、別に氣を止めて聞くといふ、それほどの異常を感じてゐる譯ではなかつたので、その儘黙つて過ぎて了つた。

やがて汽車は鐵濱を過ぎて、もう暮靄にすつかり包まれて了つた品川の海を車窓にぼんやり蒼く映しながら、灯火の濡れたやうに點きしなの、東京の街の上に入り入つた。電車の走つてゐる街路、明るい二階、廣告燈の明滅、そしてそれらの騷擾を包む、屋根々々の蒼茫たる海。……小野の心にはいつの間にか、何となく歸りを急ぐ焦躁と、妙な里心を催す胸騒ぎが、ひそかに忍び入つてゐた。それは夕景の東京へ、旅から歸つて来る人の、誰でも感じる胸騒ぎかも知れないが。――

「あゝ、何だか俺たちの留守に、東京で凶い事が起つてゐるやうな氣がしてならなう。」

小野はそんなことを口に出して云つてみた。

「うむ。なぜだか俺もそんな氣がする。ひよつとすると下宿の婆さんでも、留守の間に首でも縊りやしないかしら。何しろ汽車を下りたら眞つ直に家へ歸らうや。」

杉浦もそんな事を云ひ出した。

それで二人は東京驛へ着くとすぐ、電車に乗つて眞つ直に、本郷菊坂裏の杉浦の下宿へ、一緒に戻つて了ふことにした。そして心急いで、下宿へ歸つて見たが、貧しい五燭の電燈の下で、主人の婆さんは別事なく歸つてゐた。そして杉浦の歸りを待ち侘びた頓狂な聲で、

「お歸んなさいまし。」と、それから又小野にもすぐ、

「いらつしやいますし。」と墨句のやうにいつて迎へた。

杉浦は先に立つて、急いで二階へ上つた。そして上つて了ふと四邊を見廻して、それから後から来た小野に、妙に生眞面目な顔をしながら突然かう云ひ出した。

「あゝ疲れた。これを持つて來たんで、ほんとに疲れた。」さう言つて彼は、何物か懷中に手を入れて抑へた。

「何だい。先刻から妙に、懷へ手を入れたまんま、胸を鯨虎張らしてゐると思つたら。」

小野は聞かざるを得なかつた。

「何だか當てゝ見る。」

杉浦は惡戯的な、妙な微笑を浮べて云つた。小野は其顔を見凝め返しながら、

「まさか鳩ぢやあるまいな！」

と、直覺的に自分の先刻の欲望を思ひ出して、叫ぶやうに云つた。

「うむ。」杉浦の顔には、妙な得意の色があつた。其通りだよ。そつと二匹掴んで來てやつた。こいつを誰にも分らないやうにして、暴れ出さないやうに用心しながら、此處まで持つて來るのには、全く氣骨が折れたよ。あゝ、疲れて厭な氣持になつた。」

かう言つて彼は、内懷を廣くはだけると、足を掴んだまゝ一羽の鳩を取出した。それは五色の、ごく普通の鳩だつたけれど、永い間人の懷中などに入れられて、しつかり抑へられてゐたために、危

俱と心痛に身を縮めてゐたらしく、羽叩きもせず藻掻きもしないで、たゞ血走つたやうに赤い眼を、氣味悪げにきよときよとさせて、杉浦の部屋の中を見廻してゐた。

小野はそれを見て、一種の驚嘆を、杉浦に覺えないでゐられなかつた。杉浦が思ひ切つて、小野などかと思つたばかりのことを、不言實行する一種意力の強さと、又その鳩を此處まで持つてくる間の一種の辛抱強い持ち堪へと、それにも増して、そんな神前の鳩を、わざわざ盗んできたやうにする一種の悪魔性にと、彼は目を睜らすにはゐられなかつた。

「ふうむ、そんなことをしても君は祟りが怖くないのかねえ。」

小野は強ち迷信家でないにしても、そんな風に聞かすには居られなかつた。

「うむ。別に神罰なんざあ怖くはないが、かうして掴へて來た所で、餘りいゝ氣持ちやあない。」さう云つて、彼は鳩を掴んでゐた手を、逐ひ放つやうに放した。と、鳩は夜の座敷の中ながら、初めて翼を使ふべく解放されたに係らず、眼がさうよく見えないのか、ひどく喜びもしない調子で、大儀さうに翅をばさつかせながら、それでも横飛びに、やつと座敷の隅の違ひ棚の所へ行つて、尻込みするやうに暗い隅に身を潜めた。そしてまだ血走つた眼をばちくりさせて、杉浦と小野の方を眺めてゐた。

杉浦もそれをぢつと見凝めてゐたが、やがてくるりと振り返つて、小野に向つて突然云つた。

「おい小野、君と一緒に僕も出よう。そしてどこかへ行かうぢやないか。これから君が歸つた後、此奴と一緒に寝るんだと思ふと、さすがに俺も厭になつた。一緒に何處かへ行つて酒でも飲まう。」

「それ見ろ。祟りだ！」

小野はそれを聞くと、思はずかう云つて、併し彼の言葉に賛成して一緒に杉浦の下宿を出ることにした。が、併しその時云つた彼の「祟り」が、それから約一年の間に、どんな形となつて現はれ、以後の小野と杉浦との半生に、どんなに慘憺たる影を投げたかは、彼自身もとより知る由もなかつた。二人の出た夜の街路は暗かつた。

第二章

二人の足は自ら灯火の明るい方へ向つた。

杉浦の下宿のある暗い横町から出ると、さすがに歳末近い本郷通りは、早くも賣り出しの店飾りや紅白の旗などで装はれて、その下に宵の口の徒らに明るい燈光を、怪しく入り亂らしてゐた。そして人々の黒い影が、十二月の寒い御風の中を、アスファルトに下駄を高らかに鳴らして、不安さうに往來してゐた。殊に賣出しの飾り旗がぱたぱたと翻つて、二人に更に落着かない騒音を感じさせた。

「どこかで酒でも飲まうか。」

小野はマントも襟巻もない襟首を、縮めるやうにして四邊を見廻しながら、さう云ひ出した。

「うむ。飲まう。」

さう大して酒を呑めない杉浦も、言下に應じた。

まつたく先刻からの、理由のない、併し捉へてきた鳩の故だともいへるが、妙に湧いてきた不安と焦躁から逃れるには、まづさし當り酒でも飲む外なかつた。